

ウサギとエンコウとサル

昔々、毎日、遊んでばかりで仕事を全くしない、横着たれのウサギとエンコウとサルがおったげな。この三匹は、とにかく働くことが大嫌いで、そのくせ、楽な金儲けはないものかと、毎日そんなことばかりを夢見とった。

しかし、世の中、そんなうまい話があるわけがない。

ある日のこと、ウサギが「人のものを盗もう」と言い始めた。

他の二匹は、あまり気乗りはしなかったが、大将格のウサギには逆らえず、一緒にやることにした。とはいっても、遠くの方まで盗みに出かけるのもめんどくさい。

そこで再びウサギが「だれか旅人でも通ったら、それを襲うてモノを盗ろう」と言い、「それは良い考えだ」と待っていると、向こうから男が一人、背中にゴザを当て、前後に一つづつの袋を背負うてやって来るのが見えた。



しめしめ、あの袋の中には何か入るとるぞ、あれを盗っちゃろうと、サルは木に登り、エンコウは水の中に潜り、ウサギは草の繁みに棒切れを持って隠れた。

そんな事とはつゆ知らず、男はだんだん近づいてくる。

男が木の下までやってきたとき、とつぜんサルが木の上から男に飛びかかり顔をかきむしった。「ギャーッ」男は前が見えなくなり川の中へ落ちた。そこに、エンコウが襲いかかり水の中に引きずり込もうとした。男は溺れそうになったが、やっとこさで川から這い上がった。ようやく草むらまで逃げてゼーゼーと息を切らしていたところを、待ってましたとばかり、ウサギが、棒切れで男の頭をポカリとたたいて気絶させた。



しめしめ上手くいった。早速、モノをちょうだいしようと、二つの袋を開けた三匹はたいそうガッカリした。前の袋には生の豆が少々、後ろの袋には塩が少々入るとるだけだった。



ウサギがすぐに「俺は豆を取る」といった。エンコウも、本当は豆が欲しかったのだが、仕方なく「塩を取る」といった。残ったサルは何にも取るもんがない。あるのは、穴のいっぱい開いた汚げなゴザだけじゃ。サルはしぶしぶゴザを手に「俺はこれをもらおう」と言ってションボリと家に帰った。

さて、さて、それからじゃ。

ウサギは家に帰って早速生の豆を食べたんじゃが、元々ウサギは葉っぱは大好物だが、生の豆を食べたことがない。豆を全部食べた



ら、とたんに腹が痛くなって、目を白黒させて苦しんだ。

ウサギは「こりゃあ豆を選んで大損したわい。今からエンコウの所へ行って塩を半分もらわにゃあ割が合わん」というて、エンコウの所へ出掛けた。



一方エンコウは、塩の袋を持って水の中に飛び込み、川の中の自分の住かに戻ろうとしたが、その間に塩は水に溶け出し始めた。そんなことを知らないエンコウが、家に帰って袋を開けてみたら、中の塩は全部溶け出てしもうて何も残つとらん。「ありゃあ？いったい、どういうことじゃ。たしかに塩があったんだが、騙されたんかいな？こりゃあウサギの所へ行って、豆を分けてもらわにゃあ大損じゃ」というて、ウサギの所へ出掛けた。

そんでもって、ウサギとエンコウは道の途中でばったりと出会った。

そしてお互い「半分よこせ」「いやあ、そっちこそ半分よこせ」と喧嘩になったが、どっちも何にも残つとらんことが分かった。結局、一番つまらんモノをもらったサルが一番ええことをしたんじゃないかと、二匹はサルの家に行ってみることにした。



さて、そのころ、サルは食べるものがもらえんかったのが悔しくてたまらない。このゴザをどうしちやろうか思ったが、何の使い道もない。尻に敷いて、山の崖道を滑り台代わりにして遊んじやろう思うてやってみたが、ゴザに穴が開いとるもんじゃけえ、すぐに枝やら石やらに引っ掛かっていっそ滑らん。結局、

尻で滑ることになり全然面白くない。



「やめた、やめた」と思っていると、向こうからウサギとエンコウが何やら言いながらこっちやってくるのが見えた。「こりゃあ、ゴザをからかいに来たんじゃ、こうなりゃあ意地でも楽しげに遊んどっちゃろう」と、何回も何回も無理して滑ったもんじゃけえ、サルの尻は真っ赤に腫れ上がり、痛くて痛くて、二匹が近くまで来たときは、大声を出してワンワンと泣いてしまった。



三匹は、やっぱり悪いことをしちやあいけんのう、明日からはまじめに働こうと心を入れ替えたという話じゃ。ケッチリコ



イラスト：入澤良枝